

## 要求を表さない命令文

— 交話的 (phatisch) な用法を中心に —

鈴木 康 志

### 要 旨

命令形 (Imperativ) は一般に広い意味で聞き手に対する要求を表す。しかし命令文の中には、形態的には命令形でも、要求を表さない場合がある。Dohnhauser (1986) は、命令法の研究であまり顧みられないものとして、命令形あるいは一般に命令文とみなされる形態でありながら、別の機能で用いられるものを3つあげている。すなわち1. 条件的命令文 (der konditionale Imperativ), 2. 語りの命令形 (der narrative Imperativ), 3. 命令形の間投詞的な用法 (der interjektionale Gebrauch des Imperativs) である。

本稿では交話的 (phatisch) な用法を中心に扱うが、これは命令形が間投詞化し、会話の中で聞き手の注意を喚起するためなどに用いられ、その本来の要求の意味が希薄化しているものである。これらに共通する特徴は、1) 命令形の動詞の意味の空疎化、2) 多くは談話の初めに用いられる、3) kommen, gehen などの移動動詞, hören, sehen, schauen などの感覚動詞, sich denken, sich vorstellen といった精神的行為の動詞など、限られた動詞だけに用いられる点である。感覚動詞や精神的行為の動詞がまだ本来の意味を残すとともに、聞き手が単数か複数かの区別があるのに対して kommen, gehen は数による区別はなく間投詞により近いといえる。さらに Kraft (1999), Auer / Günthner (2005) などによれば、このような命令表現は単に会話を引き起こすためだけでなく、会話のかじ取り手段として、会話促進を促す機能や談話標識としての機能を担っている。

交話的な用法とは多少異なるが、日常言語でよく用いられ、形式的には命令形でありながら、要求を表すわけではないものに Sieh mal einer an! (こりゃ、驚いた) などの慣用語法や Leb wohl! (さようなら), Schlaf gut! (おやすみ) などの挨拶表現や願望表現がある。

キーワード：要求を表さない命令文, 条件的命令文, 語りの命令形, 交話的機能, 談話標識 (ディスコースマーカー), 慣用語法, 挨拶表現

命令形 (Imperativ) は一般に広い意味で聴き手に対する要求 (Aufforderung) を表す。しかし命令文の中には、形態的には命令形でも、要求を表さない場合がある。フランス語やイタリア語などのロマンス語や英語ではこの用法に早くから関心が向けられ、言及されている。(Löfstedt (1966), Stockwell (1973), Downes (1977), Ascoli (1978) など) ドイツ語ではこのような用法に個々にはかなり早くから触れられることはあっても (Wunderlich (1894), Schiepek (1899), Kretschmer (1910), Kieckers (1920), Behaghel (1924), Saltveit (1973), Ibañez (1977)), まとまったものは Donhauser (1986) が最初であろう。<sup>1)</sup> そこでまずこの用法の輪郭を描いてみよう。

Dohnhauser (1986) は、命令法の研究であり顧みられないものとして、命令形あるいは一般に命令文とみなされる形態でありながら、別の機能で用いられるものを3つ、ないし4つあげている。すなわち1. 条件的命令文 (der konditionale Imperativ), 2. 語りの命令形 (der narrative Imperativ), 3. 命令形の間投詞的な用法 (der interjektionale Gebrauch des Imperativs) である。<sup>2)</sup> また多少意味合いは異なるが4つめとして und で結ばれた2文でもって命令文を作りながら、前半の命令文にはほとんど意味がないものがある。これらを具体的に見てみよう。

### 1. 条件的命令文

- (1) Mach eine Bewegung, und ich drücke los. (L. Saltveit (1973: 211))  
もし動けば撃つぞ。

典型的なものは「命令文 (,) und + 平叙文」で、例文 (1) の最初の命令文 Mach eine Bewegung は「動け」という命令ではなく、Wenn du eine Bewegung machst, (もし動けば) という条件文を表している。英語圏の研究では“pseudo imperative” (擬似命令文) と呼ばれているものである。

### 2. 語りの命令形

- (2) Doch die Käfer, kritze kratze! Kommen schnell aus der Matratze.  
(W. Busch: *Max und Moritz*, S.70)

コガネ虫がガッサ、ゴツとフトンの中からでてくる。

上記はヴィルヘルム・ブッシュの『マックスとモーリッツ』の5つめのいたずらの中の一文であるが、ここで kritze kratze は文法形態的には2人称単数の命令形であるが、実際には日本語訳のガッサ、ゴツのように擬音語で、命令の意味は薄れている。

### 3. 間投詞的な命令形

- (3) Schau, Franz, sei vernünftig!  
ねえ、フランツ、バカなことはやめて。(『小学館 独和大辞典』, 1874ページ)

Schau は schauen (見る) の2人称単数の命令形であるが、「見て」という強い意味はなく、間投詞化し、会話の中で聞き手の注意を喚起するためのもので、その本来の命令の意味が希薄化しているものである。この点はあとで詳しく述べる予定である。

#### 4. und で結ばれた二つの命令文

- (4) Gehe hin und verjökele dein Leben, wie du es bisher getan! (Th.Mann: *Buddenbrooks*, S.320)  
今までそうしたように、道化して暮らせばいいだろう。

2文でもって命令文を作り、前半の命令形にはあまり意味がないものである。例文(4)の最初の *gehe hin* には「行け」という強い意味はない。この場合は、別の機能ではなく、命令表現の希薄化と言える。

次に Donhauser (1986), Kraft (1999), Auer / Günthner (2005) に基づき、このような要求を表さない命令形に関する研究を簡単に振り返ってみよう。まず Donhauser によれば、Löfstedt (1966: 90ff.) はフランス語で *syntaxe du commandement* (命令の構文) に属さないものとして以下のものをあげている。1) *imperatif présentatif-exclamatif* (提示・感嘆の命令形)、これは間投詞的の命令形に対応する。2) *imperatif narratif* (語りの命令形)、これは Kieckers や Behaghel らによって主張された *deskriptiver Imperativ* (叙述的な命令形)、つまり語りの命令形である。3) *imperatif conditionnel* (条件的命令文) をあげている。<sup>3)</sup> これらは先にあげたドイツ語のものにほぼ対応していると言える。

それに対して Ascoli (1978) は英語において、「真の命令形 (true imperative)」に対して「擬似命令 (pseudo imperative)」として以下の5つのタイプをあげている。<sup>4)</sup>

##### 1. 交話的な機能 (a phatic function)

- (5) Just imagine! She's getting married for the fifth time!  
ねえ、彼女5回も結婚しようとしているの。

##### 2. 願望 (wish or hope)

- (6) Have a nice time!  
素敵な時間を!

##### 3. 条件文と警告 (conditional sentence and warning)

- (7) Do that and I'll knock your teeth in.  
もしそれをやれば、お前の歯をへし折るぞ。
- (8) Go there at your own risk.  
行くなら自分の責任で。

4. 教示, 指示 (instruction)

(9) Go down this street and turn left at the traffic-lights.

この道を下って, 信号を左です。

5. 申し出 (offer)

(10) Let me get a chair for you.

椅子をどうぞ。

Ascoli の場合, 1. はドイツ語の間投詞的な命令形に対応する。3. もドイツ語の条件的な命令文に対応すると言えよう。しかし2. 願望, 3. 警告, 4. 教示, 5. 申し出などはドイツ語では広い意味での命令形の用法に属する。Ascoli には語り機能の命令形の例はない。Donhauser (1986: 149) はドイツ語の場合とロマンス語の Löfstedt, 英語の Ascoli を比較して表にしている。筆者の視点から多少変更をしたものを以下に示してみよう。

ドイツ語文法書	Löfstedt (ロマンス語)	Ascoli (英語)
Aufforderung i. w. S. (広い意味での要求)	syntaxe du commandement (命令の構文)	true imperative (真の命令文)
	imp. associatif (連想の命令形)	擬似命令形 2. wish (願望) 3. warning (警告) 4. instruction (教示) 5. offer (申し出)
1. interjektionaler Imp. (間投詞的の命令形)	↔ 1. imp.présentatif-exclamatif (提示・感嘆的の命令形)	↔ 1. a phatic function (交話的機能)
2. erzählender Imp. (語りの命令形)	↔ 2. imp. narratif (語りの命令形)	↔ 2. Ø
3. konditionaler Imp. (条件的命令文)	↔ 3. imp. conditionnel (条件的命令文)	↔ 3. conditional sentence (条件文)

ドイツ語とロマンス語と英語の3つに共通しているのは命令形の間投詞的な用法と条件的な用法である。語り機能の命令形はロマンス語とドイツ語に共通しているが, すでに見たようにドイツ語においても一般にはあまり用いられる用法ではないと言えよう。条件的な命令文はそれ自体いろいろな問題を含む, 大きなテーマであるので, 今回は命令形の間投詞的な用法, Ascoli の a phatic function (交話的 (話しかけ) 機能) あるいは Donhauser の der phatische Imperativ (交話的な命令形) を中心に考察したい。<sup>5)</sup>

ドイツ語ではこの用法に関してすでに Wunderlich (1894: 55f.) の redeenleitende Imperative (話しを導く命令形 Vgl. Kraft (1999: 248)) や Schiepek (1899: 110f.) の imperativische

Interjection（命令形の間投詞的用法）として触れられている。また Kraft（1999）は交話的な命令形に関し Donhauser（1986）に触れられていない、ないし Donhauser 以後この用法に触れたものとして以下のものを挙げている。Wackernagel-Jolles(1973: 168)の“Scheinaufforderung（疑似要求）”，あるいは文法的な視点というより，会話分析の研究から House（1982: 114,125）の“gambit（ギャンビット）”，Tiittula（1993: 121）の“metadiskursive Elemente（メタディスコース要素）”などであるが，これらに詳しい記述があるわけではない。そこでまずやはり Donhauser（1986: 192-200）の記述を参考にこの用法の具体的な問題を考察してみよう。<sup>6)</sup>

交話的命命令形（der phatische Imperativ）に共通する特徴として Donhauser は以下の3点を挙げている。

- 1) 命令形の動詞の意味の空疎化（semantische Entleerung des im Imperativ stehenden Verbes）
- 2) 多くは談話の初めに用いられる（auf dem Bereich der Redeeröffnung）
- 3) 限られた動詞だけに用いられる。（eine relativ eng begrenzte Gruppe von Verben）

Kraft（1999: 247）はさらに（4）形式的な性格，（5）単独ではなく，他の発言と繋がっている点などに触れている。さらに具体的に見てみよう。

(a) 特定の移動動詞，特に kommen と gehen

まず，移動動詞の kommen と gehen の結びつき，以下の例のように逆方向の動きの動詞が矛盾なく結びつくことにすでに意味の空疎化があるといえる。

(11) Geh, komm schon! さあ，おいで！

(12) Komm, geh schon! さあ，お行き！

この場合二つ目の命令形は意味を持つが，最初の命令形は空疎化で意味はなく，一種の発話行為上の補力（illokutionärer Verstärker）となっている。つまりイントネーションにより，誘い，鼓舞，拒絶から驚き等を表す。kommen, gehen は他の動詞の命令形と結びつくことも，感嘆文などと結びつくことも可能である。Donhauser は触れていないが，後に名詞が来る場合もしばしばある。

(13) Komm, gib mir deine Hand. (The Beatles: *Komm, gib mir deine Hand*)

さあ，君の手を僕に差し出しておくれ。

(14) Ah geh, so ein Blödsinn!<sup>7)</sup>

ああ，なんてバカげたこと。

(15) Komm, mein schöner Engel... Geh, du, wie heißt denn? (A. Schnitzler: *Reigen*, S.7, 10.)

ちょっと，私の素敵な天使さん。ねえ，あなた，名前は。

また *gehen*, *kommen* の命令形は *geh*, *gehe*, *komm*, *komme* の両方が可能である。

(16) *Geh nach Hause!* 家におかえり。

(16a) *Gehe nach Hause!*

(17) *Komm bald wieder!* またおいで。

(17a) *Komme bald wieder!*

一方、交話的な用法は *geh*, *komm* だけである。また例文 (20) のように、交話的な用法の *komm* のあとに、*kommen* の命令形が来る場合、*komme* のように語尾 *e* が必要になる。

(18) \**Gehe, komm, schon!*

(19) \**Komme, geh schon!*

(18a) *Geh, komme schon!*

(19a) *Komm, geh schon!*

(20) *Komm, komme schon!*

重要な点として *kommen*, *gehen* の交話的な用法は数による区別がない。これは後で見る動詞 (*sehen*, *hören*, *sich denken*) のように数の区別があるものに比べ、*kommen*, *gehen* は間投詞に近いことを示している。

(21) *Komm, geht jetzt nach Hause!*

さあ、君たち家におかえり。

(22) *Geh, laßt euch doch nicht für dumm verkaufen!*

さあ、君たち、自分をバカだなんて思わないように。

上記のように、聞き手が2人称複数 (*geht*, *lasst*) であっても *kommt*, *geht* にはならない。

なお、Donhauser の *komm*, *geh* の例文はすべて2人称親称、つまり *du*, *ihr* に対するものだけである。そこで *komm*, *geh* の後に敬称の2人称が来ることがあるのか、あるいは交話的な用法に敬称の2人称があるのかを母語話者に尋ねると、敬称の2人称が来ることはないが、敬称の2人称の交話的な用法はあるとのことである。例えば、

(23) *Komm, steh auf!* さあ、起きなさい。

(24) \**Komm, stehen Sie auf!*

(25) *Kommen Sie, stehen Sie auf!*

さらに例をいくつか見てみよう。

(26) *Geh, lasse dir den toten Jesum schenken,...*

(Bach: *Matthäus Passion*, S.63.)

さあ、イエスの遺体をもらい受けるがいい！

要求を表さない命令文

(27) Du liebes Kind, komm, geh mit mir!<sup>8)</sup> (Goethe: *Erlkönig*, S.77)

かわいい子よ、さあ、私と一緒においで。

(28) Dirne: ...Geh, bleib jetzt bei mir. Wer weiß, ob wir morgen noch's Leben haben.

(A. Schnitzler: *Reigen*, S.9.)

娼婦：ねえ、私のところにいなよ。あす生きていれるかなんてわからないんだから。

(29) Komm nimm meine Hand und geh' mit mir. (H. Fischer: *Atemlos durch die Nacht*)

さあ、私の手をとって、一緒に歩いて行きましょう。

このようにバッハ、ゲーテ、オーストリアのシュニツラーの戯曲からヘレーネ・フィッシャーの現代の曲まで、komm, geh が盛んに用いられていることがわかる。特に日常会話では、Komm, gehen wir! (さあ、行こう) のように、勧誘表現が続くことが多い。

(b) 「聞く (hören)」 「見る (sehen, schauen)」 という動詞の命令形

hör, sieh, schau などは聞き手とのコンタクトや注意をひくために用いられるが、それでも聞いて欲しい場合に Hör!, 見て欲しい場合に Schau! などが用いられることが多いことから geh, komm より動詞の意味を残していると言える。例えば辞書では Schau, schau (おやまあ) と間投詞的な訳になっているが、筆者がドイツで聞いた限りではすべて「見ること」と関連していた。<sup>9)</sup> また geh, komm と同様に、一般的に höre, schaue のように語尾 e をつけることはない。この用法が物語の命令形や geh, komm と異なるのは、複数形、つまり数による区別があることである。

(30) Hört, Leute, laßt mich zufrieden.

(30a)\*Hör, Leute, laßt mich zufrieden

さあ、皆さん、私を満足させてください。

(31) Schaut, Leute, das hab ich doch gar nicht so gemeint.

(31a)\*Schau, Leute, das hab ich doch gar nicht so gemeint.

ねえ、皆さん、それを私は全くそんなふうに思っていないですよ。

上記のように、聞き手が複数の場合は hör, schau は使えず、複数形の hört, schaut になる。実例を見てみよう。<sup>10)</sup>

(32) Hör' mal, Kind, laß dir raten, hänge deine Gedanken nur nicht zu sehr an solche Sachen... Theater. (Th. Mann: *Buddenbrooks*, S.539)

ねえハノー、忠告しておくけど、そんなものに熱中しないように、芝居なんかには。

(c) 精神的行為の動詞 *sich denken, sich vorstellen*

ここでも *sich denken, sich vorstellen* の要求ではなく、*hör, schau* 同様に聞き手とのコンタクトや注意の喚起、さらにこれらの場合は聞き手に以下の出来事に特に注目するよう予告する。動詞の意味はかなり残っていると、やはり数の区別がある。*Donhauser* は複数形をあげていないが、やはり聞き手が複数の場合は *Denkt euch, Stellt euch vor* になる。<sup>11)</sup>

(33) *Denk dir [Denkt euch], gestern ist mir doch tatsächlich die Milch übergelaufen.*

ねえ (わかる), きのう牛乳が煮え立って吹きこぼれてしまったよ。

(34) *Stell dir vor [Stellt euch vor], er ist gestern zum Direktor befördert worden.*

どう (思う), 彼がきのう部長に昇進したって。

実例を見てみよう。

(35) *Stelle dir vor, an der ganzen linken Seite sind alle Nerven zu kurz bei mir!*

(Th. Mann: *Buddenbrooks*, S.404)

あのねえ、僕の左側の神経がすべて細すぎるんだって！

このように、物語機能の命令形や *geh, komm* が間投詞に近いのに対して、他のものはまだ命令的な意味合いを残している。その識別の基準は数の区別があることである。

これらの機能はコンタクトを取ること (*Kontaktherstellung*) と注意の喚起 (*Aufmerksamkeitssteuerung*) であるが、*geh, komm* には強め (*Intensivierung*) の機能が、さらに *denken, vorstellen* では出来事を予期に反することと予告する機能が加わる。そのため、*hör* はその後平叙文、疑問文と命令文、*sieh* は平叙文と命令文、*komm, geh* は命令文、*denk dir, stell dir vor* は平叙文が続く。なお、疑問文の前では、コンタクトと注意の喚起に最も用いられるのが *sagen* の命令形の *sag, sage* である。

(36) *Sag (Sage) mal! Was soll ich da tun?*

ねえ、そこで私はなにをしなければならないの。

以上、*Donhauser* に基づいて命令形の交話的な用法を見てみた。すでに触れたように、この問題に詳しく言及しているわけではないが、*Wackernagel-Jolles* (1973: 168) ではこれらを「疑似要求 (*Scheinaufforderung*)」と呼び、*guck mal, pass mal auf, sag mal, sagen Sie*、特に子供の場合 *komm / so!* をあげている。また *House* (1982: 114, 125) は「ギャンビット = 会話を始める切り出し言葉 (*gambit*)」、として *hör mal, sieh mal, guck mal, she se mal, hörn semal* を、*Tiittula* (1993: 121) は、「メタディスコース要素 (*metadiskursive Elemente*)」と呼び、*guck / hör mal, pass mal auf, sag mal, sagen Sie* 等をあげている。また *Auer / Günthner* (2005) *komm* を談話標識 (*Diskursmarker*) として扱っている、この *komm* に関しては *Proske* (2014)



が詳しく論じている。

さて、Donhauser (1986) 以後、この問題を詳しく扱ったのは Kraft (1999), Reisigl (1999), Auer / Günthner (2005), Proske (2014) などである。<sup>12)</sup> Kraft は、このような命令表現は、コミュニケーションの舵取り手段であり、ただ会話を引き起こす (Diskursprozessierung) ためだけに使われるのではなく、聞き手との相互作用を導く機能を持っていると主張する。彼女のあげる例を見てみよう。

ある女教師が、課題が解けない生徒を励まし、ある示唆でその生徒を助けようとする。

(37) Na, komm, jetzt sag s wenigstens! (B. Kraft (1999: 251))

さあ、(正解かどうかなんて) 構わないか、言ってみて。

sag s (言ってみて) は普通の命令文であるが、na は催促 (聞き手に行動を促す) の働きがあり、komm は「(私の方に) おいで」といった空間移動的な意味の命令ではなく、課題の回答を、正解であれどうであれ言ってみなさいという、教師の生徒に対する、会話促進をうながす機能と関連している。つまり辞書的な意味とは独立して、特殊な作用をする sag mal のような命令形フレーズ、この場合の komm は、コミュニケーションの相手としての聞き手を行方へと導き、コミュニケーションをいい形で遂行するために使われる、と述べる。Donhauser の場合よりも踏み込んだ機能に触れていると言えよう。もう一例 Kraft (1999: 259f.) から見てみよう。

幼稚園での一緒の朝食の際に、家から持ってきたお弁当をまだ開いていない子に先生が語りかける。

(38) Sach=ma du hast ja noch nich ausgepackt → nå nu aber mal schnell →

gu=ma du bist ja die letzte →

ねえ、あなただけがお弁当をあけてないわよ、さあ急いであけて、ごらん、あけてないのはあなただけよ。

ここでは Sach=ma (Sag mal) gu=ma (guck mal) が命令形のフレーズであるが、Sach=ma がまさに交話的な機能で用いられているのに対して、gu=ma は sach=ma より具体的な意味を残している。それは拙訳から読み取れると思う。

もう一例 sag mal が要求というより、談話標識 (Diskursmarker)<sup>13)</sup> の機能を担っている例を Auer / Günthner (2005: 345f.) から引用してみよう。ダニ咬傷にあい、女医のもとに出かけたが、その医者がなにも知らなかったことを憤慨して述べるガービとその友人との電話で

の会話である。

(39) Zeckenbisse

Gabi: aber die WUSST natürlich wieder net,  
wer des hier MACHT  
stell dir mal VOR.  
die hat KEI:NE AH:NUNG=

→ Anna: =<<f, entrüstet> sag mal. >  
<<f, entrüstet> un- warum macht die die beRATung.>

Gabi: ich weiß es nich.

ガービ でもその女医知らなかったの  
だれがここで責任があるのよ。  
考えてよ  
女医さんにもわからないって。

アナ <憤慨して> なんてこと！  
<憤慨して> なぜその女医が助言してんの。

ガービ わからないわ。

ここでの sag mal はガービになにかを言うのを要求しているのではなく、憤慨を表している。このように形態的には命令形でも、要求を表さない命令文が多々存在する。

最後に、交話的な用法とは多少異なるが、日常言語でよく用いられ、形式的には命令形でありながら、その辞書的な意味での命令、要求を表すわけではないものに少し触れてみよう。Kauffer (2013) が Phraseologisme (慣用語法) としてあげたもの、Markiewicz (2000b: 182) が Phativ の一部として扱っている挨拶や別れの表現形式がある。

フランス語と比較して Kauffer があげているのが Na warte!, Na, hör mal!, Sieh mal (einer) an! などである。Na warte! (よく見とけよ!) は警告を表す、心態詞 nur と結びついた Warte nur! (覚えているよ) といった脅しを表すのと似ている。<sup>14)</sup> ともに warte (待て) という意味は薄れている。Na, hör mal! (なんてバカなことを!) は抗議を表す。Hört!, hört! (異議あり) も同じと言えるかもしれない。やはり「聞け」という意味は背後に隠れている。Sieh mal einer an! (こりゃ、驚いた) は驚きを表す。このように不定代名詞 (einer) と命令形の結びつきは興味深いテーマであり、別に扱う予定である。<sup>15)</sup> なぜこれが驚きになるかの一つの解釈は、この表現が、話者がある出来事や事態に驚き、それを周りの人にもわかってもらうた

めに使われることがあり、「(この出来事が驚きであることを、みなさんも同意するよう) ちょっと見てください」というものである。

挨拶や別れの表現に命令形がしばしば使われることは、鈴木(2007: 65f.)でも簡単に触れたが、Markiewicz(2000a: S.481f.)は挨拶の形式として *Grüß dich!*, *Grüßt euch!* (こんにちは), *Seid begrüßt!* (ようこそ),<sup>16)</sup> 別れの表現形式として *Macht's gut!* (お元気で!), *Bleibe gesund!* (お達者で!), *Leb wohl!* *Lebt wohl!* (さようなら!) をあげている。*Grüß dich!*, *Seid begrüßt!* はもうあまり使われなと言えよう。*Macht's gut!* は ZDF のニュース番組 *Heute Journal* のあとの天気予報で、Gunther Tiersch が最後に述べる言葉である。3つとも「うまくやれ」「健康であれ」「幸せに暮らせ」という動詞の意味を保持しながら、別れの表現として定着したものといえよう。ただしやはりやや古風な表現と言えるかもしれない。また *Schlaf gut!* (お休み) といった願望表現も加えることができよう。

以上、形態的には命令形でも、聞き手に要求を表すわけではない表現の中から、特に交話的な用法に関して論じてきた。これらは日常会話では重要な役割を果たすとともに、文学作品の講読や翻訳にも大きな意味をもつものである。

\*\*\*

原稿作成にあたりフライブルク大学 Peter Auer 教授、一橋大学の三瓶裕文教授から貴重な指摘をいただいた。また、インフォーマントとして Lena Murakami さん、Karl Lüke さんにお世話になった。記して感謝申し上げたい。

## 注

- 1) Donhauser (1986), 34-35, 143-200ページ参照。
- 2) 先にあげたドイツ語文献のうち Saltveit (1973), Ibañez (1977) は条件的命令文について、Kretschmer (1910), Kieckers (1920), Behaghel (1924: 247) は語りの命令形について、Wunderlich (1894: 58ff.), Schiepek (1899: 108f.) は命令形の間投詞的用法について触れている。また Spitzer (1918), Huber-Sauter (1951) はロマンス語のこの用法に触れている。
- 3) Löfstedt (1966) 特に90-100ページ、Donhauser (1986: 144f.) 参照。
- 4) Ascoli (1978) 405-415ページ。

なお、Stockwell (1973: 636f.) では以下の3つが挙げられている。

(a) 条件的命令文 (conditional imperatives)

*Come here, and I'll give you a dollar.* (ここに来れば、1ドルあげるよ。)

(b) 許可命令文 (permission imperatives)

*Buy whatever you like.* (好きなものをなんでも買いなさい。)

(c) 願望命令文 (wish-imperatives)

*Get well soon.* (お大事に、すぐよくなりますように。)

また Downes (1977: 78) では Stockwell (a) (b) (c) 以外に Bolinger (1967: 352f.) から、仮定命令形やコンテクストにおける返答などを挙げている。さらに関連性理論の Wilson & Sperber (1988:

80f.) は Advice (助言), Permission (許可), Threat and dares (脅しと挑発), Good wishes (願望), Audienceless cases (相手なしのケース), Predetermined cases (さかのぼっての要請)などをあげている。Wilson & Sperber に関しては今井 (2001: 88f.) 参照。

Vgl. Altmann (1993: 1007f.), Schilling (1999: 67).

- 5) 「話し手と聞き手の間との親近感を推進・持続する (『現代言語学辞典』, 485ページ)」ための言語活動。Markiewicz (2000b: 182) によれば、もともと Karl Bühler によるとのこと。ただし上記の言語学辞典などによれば、人類学者のマリノフスキーが使い始めた用語。周知のようにローマン・ヤコブソンは言語の6機能の一つにあげている。
- 6) ドイツ語はもとより、Ascoli を除けば英語においても、命令形の問投詞的な用法、つまり命令形の交話的用法に Donhauser ほど詳しく触れている記述はないのではないかと。そこでドイツ語におけるこの用法に関して Donhauser に基づいて紹介してみたい。そのため以下例文に出典が記されていないものは Donhauser (1986: 192-202.) からのものである。
- 7) 本稿では komm, geh のみを扱うが地方により様々な言い方があるようである。例えばバイエルンやオーストリアでは ach geh, その他では ach komm がよく用いられるようである。
- 8) シューベルトの作曲で有名なゲーテの詩「魔王 (Erlkönig)」の一節 (Du liebes Kind, komm, geh mit mir) である。この部分の日本語訳をみると、おもしろいことに訳のタイプは二つあるように思われる。一つは komm を辞書通りの意味の命令 (おいで、私と一緒にいこう (山柘訳)), とするもの、もう一つは komm をあえて訳さない (おいでよ (大木・伊藤訳)) ものである。大木・伊藤の「(一緒に) おいでよ」, はドイツ語の geh mit mir の訳と思われる。交話的に考えれば「さあ、おいでよ」といった訳も可能と思われる。ネイティブはやはり交話的とみるようであるし、「おいで、私と一緒にいこう」なら komm und geh mit mir になると思われるので、やはり大木・伊藤訳か交話的に訳するのがいいのではないだろうか。
- 9) アルザスをドライブしていた時、急にコウノトリが現れた。そのときドライバーは Schau, schau! と言った。日本語での「見て、見て！」に近いように思われる。日本語の場合も相手に注意を引く機能がある。
- 10) Donhauser (1986) は du, ihr の場合のみを扱っているが、Sie の場合もある。  
Na, hören Sie mal! Seh ich ein Verbrecher aus? (F. Dürrenmat: *Die Panne*, S.18)  
ねえ、私が犯罪者に見えますか？
- 11) 実例はないが、母語話者に尋ねると、例文 (33), (34) も聞き手が複数であれば Denkt euch, gestern..., Stellt euch vor, er ist... になるとのこと。
- 12) Markiewicz (2000a, b) も交話的な用法に関して触れているが、ほとんど Donhauser (1986) の記述にそったもので、それがポーランド語ではどうであるかを扱っているだけであるので、ここでは触れる必要はないと思われる。
- 13) 談話標識 (ディスコースマーカー) とは、会話をスムーズには運ぶための言語手段。詳しくは高田・椎名・小野寺編著 (2011) 28ページ, 73ページ以下参照。
- 14) 鈴木 (2008) 92ページ以下参照。
- 15) 拙稿: 命令形の主語について - 不定代名詞を主語とする命令形を中心に - 「ドイツ文学研究」第48号 日本独文学会東海支部 (印刷中) 参照。
- 16) sei begrüßt は受け身の命令形である。ドイツ語文法記述は長い間ラテン語文法記述のもとにあり、ラテン語に受け身の命令形があるため18世紀くらいまで、無理にドイツ語の受け身の命令形も記述されてきた。現在の文法書では、1. 受け身の命令形には触れないもの、2. sein + 過去分詞の形だけ触れるもの、3. sein + 過去分詞に触れるが、すでに古風な表現であると記述するものに分かれる。詳しくは Donhauser (1986:12f.) 参照。

### 使用テキスト

- Bach, Johann Sebastian: *Matthäus-Passion*, Stuttgart (Reclam), 2000.  
Beatles, The: *Past Master*, Volume one, 1988 EMI Records Ltd.  
Busch, Wilhelm: *Max und Moritz*, Stuttgart (Reclam), 1996.  
Dürrenmatt, Friedrich: *Die Panne*, Zürich (Diogenes), 1988.  
Fischer, Helene: *Farbenspiel* 2013 Polydor (Universal music)  
Goethe, Johann Wolfgang: *Gedichte*, Stuttgart (Reclam), 1975.  
Goethe, Johann Wolfgang: *Faust Erster Teil*, Frankfurt am Main (Insel Verlag), 1976.  
Mann, Thomas: *Buddenbrooks*, Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag), 1996.  
Schnitzler, Arthur: *Reigen*, Stuttgart (Reclam), 2014.

### 参考文献

- Altmann, Hans (1993): Satzmodus, In: Jacobs, Joachim (Hrsg.): *Syntax. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung*, Berlin, New York (de Gruyter), S.1006-1029.  
Ascoli, Christina (1978): Some pseudo-imperatives and their communicative function in English, In: *Folia Linguistica* 12, S.405-415.  
Auer, P. / Günthner, S. (2005): Die Entstehung von Diskursmakern im Deutschen – ein Fall von Grammatikalisierung? In: Leuschner, T., Mortelmans, T. und De Groot, S. (Hg.) *Grammatikalisierung im Deutschen*, Berlin/ New York (de Gruyter), S.335-362.  
Behaghel, Otto (1924): *Deutsche Syntax, Bd.2 Die Wortklassen und Wortformen*, Heidelberg (Carl Winter Universitätsbuchhandlung).  
Bolinger, Dwight (1967): The imperative in English, In: *To honor Roman Jakobson. Essays on the occasion of his seventieth birthday*, volume I, The Hague/Paris, (Mouton) S.335-362.  
Donhauser, Karin (1982): Ein Typ mit *und* koordinierter Imperative des Deutschen, In: *Sprachwissenschaft* 7/2, S.220-257.  
Donhauser, Karin (1986): *Der Imperativ im Deutschen, Studien zur Syntax und Semantik des deutschen Modusystems*, Hamburg (Helmut Buske).  
Downes, William (1977): The imperative and pragmatics, In: *Journal of Linguistics* 13, S.77-97.  
House, Juliane (1982): Gambits in deutschen und englischen Alltagsdialogen. Versuch einer pragmatisch-kontrastiven Analyse, In: *Grazer linguistische Studien* 17-18, S.110-132.  
Huber-Sauter, Margrit (1951): *Zur Syntax des Imperativs im Italienischen*, Affoltern am Albis (Dr. J. Weiß).  
Ibañez, Roberto (1977): Über die Beziehungen zwischen Grammatik und Pragmatik. Konversationspostulate auf dem Gebiet der Konditionalität und Imperativität, In: *Folia Linguistica* 10, S.223-248.  
Kauffer, Maurice (2013): Phraseologismen und stereotype Sprechakte im Deutschen und im Französischen, In: *Linguistik Online* 62, 5, S.119-138.  
Kieckers, E (1920a): Zum Nhd. Infinitivgebrauch, In: *PBB* (Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur) 44, S.509-512.

- Kieckers, E (1920b): Die 2. Sing. Imperativ im Nhd. als Indicativ, In: *PBB* (Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur) 44, S.513.
- Kraft, Barbara (1999): Aufforderungsausdrücke als Mittel kommunikativer Lenkung. Überlegungen zu einem Typ von Sprechhandlungsaugmenten. In: Bührig, K./ Matras, Y. (Hrsg.) *Sprachtheorie und sprachliches Handeln*, Tübingen (Stauffenburg), S. 247-265.
- Kretschmer, Paul (1910): Zur Erklärung des sogenannten Infinitivus historicus, In: *Glotta* vol. 2, S. 270-287.
- Löfstedt, Leena (1966): *Les expressions du commandement et de la défense en Latin et leur survie dans les langues romanes*, Helsinki (Société Néophilologique).
- Markiewicz, Aleksandra (2000a): Zur phatischen Anwendung des Imperativs im Deutschen und Polnischen, In: *Studia niemieznawcze* 19, S.475-484.
- Markiewicz, Aleksandra (2000b): *Der Imperativ im Deutschen und Polnischen*, Kraków (Taiwpu Universitas).
- Miodek, Waclaw (1994): *Die Begrüßungs- und Abschiedsformeln im Deutschen und im Polnischen, Heidelberg* (Julius Groos).
- Proske, Nadine (2014): *h ach KOMM; hör AUF mit dem klElnkram*. Die Partikel *komm* zwischen Interjektion und Diskursmarker, In: *Gesprächsforschung-Online-Zeitschrift zur verbalen Interaktion* 15, S.121-160.
- Reisigl, Martin (1999): *Sekundäre Interjektionen: Eine diskursanalytische Annäherung*, Frankfurt am Main (Peter Lang).
- Saltveit, Laurits (1973): Der Imperativ als Ausdruck für Bedingung im Deutschen, In: Sitta, H. / Brinker, K. (Hg.) *Studien zur Texttheorie und zur deutschen Grammatik, Festgabe für Hans Glinz zum 60. Geburtstag*, Düsseldorf (Pädagogischer Verlag Schwann), S.209-222.
- Schiepek, Josef (1899): *Der Satzbau der Egerländer Mundart*, Bd.1 Prag (Verlag des Vereins für Geschichte der Deutschen in Böhmen).
- Schilling, Ulrike (1999): *Kommunikative Basisstrategien des Aufforderns. Eine kontrastive Analyse gesprochener Sprache im Deutschen und im Japanischen*, Tübingen (Max Niemeyer).
- Spitzer, Leo (1918): *Aufsätze zur romanischen Syntax und Stilistik*, Halle (Max Niemeyer).
- Stockwell R. P. / Schachter P. / Hall-Partee B. (1973): *The major syntactic structures of English*, New York etc.,( Holt, Rinehart and Winston ),S.633-671.
- Suzuki, Yasushi ( 2016): Über die Imperativierbarkeit der deutschen Verben, gehalten am 5. Februar 2016 an der Universität Freiburg (Manuskript).
- Tiittula, Liisa (1993): *Metadiskurs, Explizite Strukturierungsmittel im mündlichen Diskurs*, Hamburg (Helmut Buske).
- Wackernagel-Jolles, Barbara (1973): „Nee also, Mensch, weißt du...“ Zur Funktion der Gliderungssignale in der gesprochenen Sprache In: Wackernagel-Jolles (Hg.) *Aspekte der gesprochenen Sprache. Deskriptions- und Quantifizierungsprobleme*, Göppingen (Verlag Alfred Kümmerle), S.159-181.
- Waltereit, Richard (2002): Imperatives, Interruption in conversation, and the rise of discourse makers:

- a study of Italian *guarda*, In: *Linguistics* 40-5, S. 987-1010.
- Weinrich, Harald (2007<sup>4</sup>): *Textgrammatik der deutschen Sprache*, Hildesheim · Zürich · New York (Georg Olms Verlag), S.267-276.
- Wilson, D, / Sperber D. (1988): Mood and the Analysis of Non-declarative Sentences. In: Dancy J, Moravcsik J.M.E., Taylor C.C.W. (eds) *Human Agency. Language, Duty and Value*, Stanford, California (Stanford University Press).
- Winkler, Eberhard (1989): *Der Satzmodus "Imperativsatz" im Deutschen und Finnischen*, Tübingen (Max Niemeyer).
- Wrátil, Melani (2005): *Die Syntax des Imperativs Eine strukturelle Analyse zur Westgermanischen und Romanischen*, Berlin (Akademie Verlag).
- Wunderlich, Dieter (1984): Was sind Aufforderungssätze?, In: Gerhard Stickel (Hg.) *Pragmatik in Der Grammatik* (Jahrbuch des IdS 1983) Düsseldorf, 92-117.
- Wunderlich, Hermann (1894): *Unsere Umgangssprache in der Eigenart ihrer Satzfügung*, Weimar und Berlin (Verlag von Emil Felber).
- Wunderlich, Hermann (1925<sup>3</sup>): *Der deutsche Satzbau*, 2 Bde. Berlin (J.G. Gotta'sche Buchhandlung)。
- 今井邦彦 (2009) : 『語用論への招待』 大修館書店。
- 国松孝二編 (1990) : 『独和大辞典』 小学館。
- 鈴木康志 (2007) : ドイツ語命令・要求表現のさまざまな形態について - 『ブデンプロック家の人々』 を例として 「言語と文化」 第17号 49 ~ 71 ページ。
- 鈴木康志 (2008) : ドイツ語命令・要求表現における心態詞について 「言語と文化」 第18号 85 ~ 110 ページ。
- 鈴木康志 (2012) : Imperativ (命令形) をつくらない動詞について 「言語と文化」 第27号 25 ~ 38 ページ。
- 鈴木康志 (印刷中) : 命令形の主語について - 不定代名詞を主語とする命令文を中心に - 「ドイツ文学研究」 日本独文学会東海支部第48号
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子 編著 『歴史語用論入門』 大修館書店。
- 田中春美編 (1988) : 『現代言語学辞典』 成美堂。

